

『たてわり活動を通して学ぶ』

ある学校の学校便りのタイトルである。

少し内容を引用したい。

本校では年間11回のたてわり活動を行います。たてわり活動は、異学年でたてわりをグループを構成し、様々な活動をしていく中で学年に応じた相手を思いやる心を育てることをねらいとしています。たてわり活動を通して、上級生は下級生に対する思いやりの気持ちを育み、リーダーシップを学びます。また、下級生は上級生の姿から様々な知識や知恵を学び良好な人間関係を体験することができます。

8日にはたてわりグループによる全校遠足が行われます。今年度の全校遠足はたてわりグループごとに電車に乗って公園に向かいます。自分達の思いや願いをグループで協力して実現することで、達成感を味わうことをねらいとしています。

全校遠足に向けて3回のたてわり活動を実施してきました。活動中の子どもたちの様子を見ると、どのグループも6年生がリーダーシップを発揮して、楽しそうにゲームや話し合いをする姿を見ることができます。

(後略)

私も、今から20年以上前のことになるが、たてわり班組織で児童を動かしていた時代がある。100人規模の小さな小学校だったこともあり、全校をたてわりにして春、秋の遠足は勿論のこと、各種行事、毎日の清掃活動も行っていた。

春の遠足は炊事遠足。たてわり班毎にメニュー、持ち物、ゲームを考えるのだが、リードするのは班長の6年生と副班長の5年生だ。話し合いも上手に下の学年の子ども達をリードしていく。当日の炊事の采配をふるうのも上級生だ。下級生は指示に従って準備を進めていった。

当然トラブルがなかったわけではない。日常の清掃活動や他の班活動の中で、上の学年の子どもからは「下級生が言うことを聞いてくれない」という訴え、下の学年の子どもからは「上級生が怖い」などの訴えがだされた。ところが、トラブルに際しての先生方の出番はほとんどなかった。なぜなら、トラブルが発生すると、時を見てリーダーの6年生が班員を招集、話し合いを通して自力解決をしていったから。

とはいっても、たてわり班活動は取り組み始めから順調に進んだわけではなかった。初年度は先生方の手助けを得ながらだった子ども達も、2年、3年と経験を積むうちに自力解決の方法を身に付けていった。6年生の班長は班をまとめ、5年生は副班長として班長を支え、それを見て育ってい

ったのが下級生だった。5年生は6年生の班長を手本にし、次年度自分がリーダーになる心構えを育てていけたともいえる。

集団が形成されるとそこに人間関係が生まれる。少子化が進む中、上手に人間関係が築けない子ども達が増えてきている。トラブルも人と人とがどのように関わっていけばよいかを学ぶ良い機会と考えたいのだが、今の子ども達はそれができない。

小学校勤務が長かった私だが、中学校に勤務していた折、中学生が自分達の人間関係の問題を解決できない場面に幾度も出会った。

例えば、「〇〇さんがにらんでくる気がする。」と先生方に相談に来る生徒達。「気がする」と本人が感じていることを直接相手に聞いてみれば、お互いをもっと理解しあうことができるのに、それができないのだ。

なぜか？千葉大学の明石要一先生は指摘する。

「今の子どもたちは幼児期の遊びが不足しているため、応用が利かない。また、3・4年生の放課後体験が乏しいため、意思決定ができない。放課後体験が消えると体験格差が生まれてくる。」

確かに“幼児期の遊びが不足している”こと、“放課後体験が乏しい”ことは理解できる。安全に遊ぶ場所がない、遊ぶ友達がいても室内での遊びである等など、今の子ども達を取り巻く環境は必ずしも良好とは言えない。

今回、この学校便りを読みながら、自分が実践してきたことを思い出し、改めてたてわり班活動の大切さを思い出した。

異年齢の子ども達が一緒に活動することは、同年齢の友達同士では体験できない経験を積むことができる。上級生は下級生に対する思いやりの心を育てていく一方で、下級生は上級生に学び、「こんな上級生になりたい」と目指したい上級生像を膨らませてゆくことができる。

人間関係作りが得てではない子ども達が増えている今、たてわり班活動を通し子ども達に様々な活動をさせながら、学年に応じた思いやりの心を育る実践を続けるこの学校に拍手を送りたい。